

第1回道の駅「来夢とごうち」再整備基本計画策定検討委員会

と き：令和3年3月16日（火）10：00～12：00

ところ：安芸太田町地域支援センター2階

1. 開会

町長あいさつ

観光、産業振興には道の駅の再整備が起爆剤となると考えている。

基本構想を町でまとめており、昨年夏からは町民の方と意見交換会を進めている。町として重要な案件であることから早急な対応が必要であると考えており、年度末で忙しい中、本日委員会を開催させていただいた。

委員の皆様には2点お願いをしたい。

1点目は、道の駅再整備基本計画は町が主体でまとめていく必要があるが、検討委員会でアドバイスをいただきたい。そのような視点から日本全体の道の駅の検討に携わっていただいている方、町の観光振興計画をまとめていただいた方、町の団体の方に集まっていただいた。

2点目は、検討委員会前に、町民の意見交換会を実施した。町民みなさんの道の駅になっていくべきであると考えており、この委員会を公開とさせていただきたい。また、その都度意見交換会を開催し、町民の皆さんの意見も取り込んでいきたいと考えている。

限られた時間であるが、有意義なご意見をいただきたい。

2. 協議事項

(1) 会の目的・趣旨・位置づけ、全体の検討体制について

事務局

平成29年に作成され、国土交通省に申請したところ重点道の駅に30年に指定された。当初はすぐに整備を予定していたが、運営主体の設置があり、地域商社あきおおたを設置した。E-コマースなどをやってきており、観光町づくり法人として登録を実施した。ここを土台にして基本計画を作っていくのが現時点である。

利用者の方に安全安心な拠点、観光、農業を中心とした産業振興を図る場として位置づけを考えている。また、事業をしている方、地域の方々にも利用してもらえる場とすることを考えている。

観光・産業の基本戦略が必要と考えている。道の駅の箱ができて、出店する方や出品されているものが地域のものでない道の駅も多い。そのため、その準備をしてい

くための観光・産業の基本戦略を作成することが必要であると考えている。

この委員会では、2つのことを目標としてやっていきたい。

1点目は、観光・産業振興戦略を確認すること。どのように道の駅を活用するかなどの目標を明確にし、共有していきたい。5月、6月をめどに進めていきたい。

2点目は、観光・産業振興戦略を踏まえ、基本計画を策定することである。

導入機能や施設、配置、運営体制などの検討を行っていく。計画を検討する体制は、役場内でのプロジェクトチームを作り、関連の各課とともに、基本計画の検討をする。

住民の意見交換会も随時やっていく。ここでプロジェクトチームへの意見を出していただくこととしている。また、策定委員会は、プロジェクトチームの作成する計画を随時公表し、アドバイス、提言をいただきたいと思っている。いわゆる諮問委員会という役割である。

調整は、事務局として企画課が行い、企画課、委員会をサポートする事業者としてパシフィックコンサルタンツに依頼している。

今後検討を行っていくスケジュールは、役場内では、プロジェクトチーム会議のキックオフをしておき、本日が委員会の第1回となっている。

本日は、まず趣旨・位置づけを確認していただく場としている。委員会はプロジェクトチームの検討を踏まえ、6回、約2か月に1回のペースで開催を予定している。

全体像、道の駅をどう使うのか、観光・産業面について、どう展開するのか、観光の案内を道の駅でしていくために観光拠点の整備をどうするかなどを委員会で諮ってきたい。

(2) 参加者の自己紹介

跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部観光デザイン学科 篠原 靖

地域の活性化を観光でおこなう。関係人口が話題になっているが、それを中山間地でもしかけることを専門にしている。

国交省の道の駅の検討委員会の委員をしている。比治山大の山田先生もメンバーである。

今日は後程、最新の道の駅の情報を東京から提供する。

広島経済大学 経営学部スポーツ経営学科 中村 隆行

広島経済大学教員であり、広島NPOセンターでNPO支援を20年やっている。

広島において、道の駅を民間から提案して国がまとめたという経緯がある。そういった社会実験をした経験がある。

当初は、地域おこしの拠点、また地域の人がいて情報発信をして地域づくりをする。そこでお茶も飲めるという位置づけであった。

今は産業振興にシフトしてきている。災害拠点という活用方法もある。

ここでは、情報発信の拠点になるのかなという思いがある。

安芸太田町では、観光振興の委員会をしていたこともあり、一緒に考えていきたい。

安芸太田町議会を代表する者 中本 正廣

議会では、地方創生の委員会があり、委員長をやっている。平成 29 年には、地域創生の産業建設委員会として、東京陳情に行った。今は、道の駅の視察を議会でしている。成果として、国交省で重点道の駅として採択された。

一番大事なのは、産業面を強化すること。農産物が一番の目玉になる。しかし農産物を出品する数が少ない。道の駅の立ち上げでは、営農指導員を含めて、地域の産物をもっと増やしていかないといけないと感じている。

安芸太田町商工会を代表する者 津田 宏（代理：佐々木事務局長）

役場の職員であったころ、道の駅の計画を立て、建設をした。広島で第 1 号だったと思う。

当初は木造で計画が進んでいたが、知らない間に突然コンクリートに変わった。

これから新たな道の駅が整備されるということで、ハード、ソフトについて皆さんの意見を聞きながら整備されるということを期待している。とくにソフト面の充実が安芸太田町のシンボルとしての道の駅、今後を左右する起爆剤になると考えている。

広島市農業協同組合を代表する者 山田 和枝

普段から道の駅に行く。その利用の感想をお伝えする。いいものが販売していないとだめ。萩のシーマートでは、漁師がその日に揚がった魚を売っている。非常に価値がある。アリストぬまくまは、地元の人が自転車で地元のを出品している。そう思ったほうが、このまちにとってふさわしいのではないかと思う。

最初から大きくいくのか、小さくいくのか、人口を踏まえながら、地元で人が楽しめる、生きがいとなる道の駅がよいと思う。

安芸太田町PTA 連合会母親（女性）代表 大庭 由弥

小学生 2 人の母親。下の子が車いすなので、だれにでも優しく、みんなで使いやすい道の駅になればと思う。

道の駅周辺出店者事業者協議会を代表する者 波佐本 栄二

約 20 年、商工観光課、観光協会をもとに協議会は現在 5 件が出店している。

現状は地域商社と共にならんでいるが、問題の指摘も受けている。

このまま、新しい道の駅に営業できるのかを考えながら営業している。

産業より観光面がないと売り上げがない。冬のスキー客が少ない。観光がないと売り上げが少ない。

三段峡、深入山、恐羅漢を頑張ってもらわないと、できてすぐは良くてもすぐに道の駅がだめになる。そのため観光をぜひ強化していただきたい。

安芸太田町自治振興会を代表する者 長尾 隆（代理：堀田龍幸）

四季を通じて、みなさんをあたたかく迎えて、来てよかったという雰囲気になればいいと思う。

太田川産直市を代表する者 河本 昭文（代理：沖段琢磨）

産直市の会計をしている。この度、12回の決算総会をした。ということは、今の場所ですら13年の産直市をひらいている。

当初売上は1000万であったが、今期は3700万を超えた。地域商社の志賀さんの活躍が大きい。R3年は4000万近い予算を立てている。

産直市で言われていることは、国道から見えない。規模が小さいということである。

中本議員さんからのお話のように、地元から農産物地が出てくるのが少ない。生産者は出したいと考えていても、売り場が小さく、出すと売り場が混雑してしまう。苦慮している。再生整備を非常に期待している。

現状からの意見を出して、より良い道の駅全体像が見えればと思う。

一般社団法人地域商社あきおおたを代表する者 栗栖 修司（代理：志賀俊介）

業務委託で産直市の運営サポートをしている。販売する中身が大切だと思う。

ハードが整っても中身がないといけない。中身をしっかりとつくること、そのなかでの地域商社の役割が重要になる。

道の駅ができるまでに、コンテンツ・産業活性化に貢献できればと思っている。

安芸太田町農業委員会を代表する者 河本 穂津雄

百姓家役員をして、6次産業化や加工に携わっている。道の駅に期待している。

いいところ、わるいところを皆さんと一緒に安芸太田にふさわしい道の駅となるようやっていきたい。

副町長 小野 直敏

安芸太田にとっては非常に大きい事業である。

道の駅は、産業・観光の基盤とする核となる施設である。

安くて地元の儲けがなくてはだめである。また、たくさん産品があってもお客さん

が来ないもだめである。出品される方、地域の方、運営する方、みなさんが納得する道の駅になればと思う。

プロジェクトメンバーの事務方トップを担う。いろいろな機能を考えているので、みなさんのご意見をいただきたい。

(3) 委員長・副委員長の選任

会場

推薦は無いか。

事務局

事務局案は委員長篠原氏、副委員長は商工会の津田氏を推薦する。

太田川産直市を代表する者 河本 昭文（代理：沖段琢磨）

委員長は町の大事なプロジェクトであり、町内の人に任せたいという想いがあるが、みなさんが良ければ構わない。

会場

推薦者に賛同

事務局

事務局案は委員長篠原氏、副委員長は商工会の津田氏を選任する。

(4) これからの道の駅に関する有識者からの話題提供（篠原委員長より）

<重点道の駅への選定理由と他の重点道の駅の現状について>

道の駅の整備については、地域の中の情報だけではなく、最先端の道の駅の情報が必要と考えている。人口の減少をおさえながら移住者を増やす道の駅となるよう手伝っていききたい。

まずは自己紹介をさせていただく。旅行会社に 30 年勤めツアーコンダクターをやっていた。その中で、地域創生として客がきていないところに仕掛け、着地型観光のスタイルを展開していた。また、内閣府、総務省などの取組みに参加していた。

現場とビジネスをつなげるというスキルをもっていることから、観光庁、GOTO キャンペーンの事業設計もしていた。また、コロナ禍のなか、感染症との闘いの中で、経済、観光面でどうやっていくか、地方における観光の現状など二木先生と討論させていただいている。

道の駅来夢とごうちは、県内でも最初に設置されたと言われていたが、道の駅は平成 3 年社会実験として実施し、好評であったことから広がっていった。休憩機能、情報発信機能、地域連携機能という 3 つが道の駅の基本機能となっているが、この 3 つの機能をまちの政策とつなぎあわせていくつなぎ役が道の駅であると捉えられる。

道の駅は 103 か所が平成 5 年にオープン、その後増加し、令和 2 年で 1180 か所がオープンしており、今後も増加する傾向である。

道の駅にはゲートウェイ型と地域センター型の機能がある。地域センター型はブランド化などまちの課題を解決するものである。

道の駅は社会情勢とともに発展してきている。第 1 期はバブルが崩壊した時代、第 2 期は中国うなぎの偽装で食への安全問題が社会問題となった時代、第 3 期は団体旅行から個人旅行へ、列車からマイカーの旅へ、着地型旅行（地旅）が動き出す時代である。道の駅の機能が増加し、体験、キャンプ場、文化施設、病院など道の駅を核にまちづくりを行う、多様化が進むのが第 3 期である。

このように目的地化する道の駅が増え、第 4 期は地域創生の拠点として、少子高齢化を解決する場として道の駅を活用する方向となった。高齢化の進むまちでは、道の駅が買い物難民へ販売車を出す、また、道の駅でまちの用が済ませられるような交通結節点機能が求められている。また、消費者のライフスタイルの変化、価値観の多様化、本物志向という中で、安芸太田でしか体験できないことなどを踏まえたコンセプトづくりが必要である。「いつでも、どこでも、どなたでも」という旅のスタイルから、旅先での「今だけの旬にこの土地でとれたものを私だけに特別に提供してくれる旅へ」に変化している。

このような中、国土交通省では、最先端の動きとして 2020 年から第 3 ステージへかじをきった。第 3 ステージは、地方創生・観光を加速する拠点という位置づけで考えられており、横の連絡をとりながら連携するという動きが求められている。

コロナ禍の中、インバウンドは現在難しいが、今後は、訪日外国人が目指す拠点、防災拠点、高齢者、子育てにやさしい拠点、新しい交通結節点という機能が道の駅に求められている。

安芸太田の着地型旅行商品について、何人まで対応できるのか、いつまでに申し込めば対応可能かなどをキチンと整理すべきである。修学旅行での探求学習、体験を通し、SDGS がなぜ大切なのかということ学ぶプログラムを今後観光の施策とあわせて作っていくことが地方行政に求められている。

道の駅の整備が遅れているという話をされていたが、安芸太田町では商社あきおおたが立ち上げられている。道の駅整備は箱から入るところが多いが、新たなまちの戦略をテーブルに乗せ、経済が回るしくみとして地域商社を作って進めるというソフト部分が先きにできている状況であり、道の駅の整備を進めるうえではベストな進め方であると思う。

次に具体的な全国モデル道の駅の紹介をする。

とみうら枇杷倶楽部のビジネスモデル。観光行政として伊豆半島が独り勝ちで千葉県は遅れていた。ここは人口減少で苦しんでおり、漁業と冬の花、びわしか産業がなかった。そこで市長が観光面と地域産業をつなげる場として道の駅的设计をした。ここには市町村大合併で 8 つの道の駅がある。この 8 つの道の駅を 1 本化するための地域商社を立ち上げている。また、地元のものにこだわりつなげていくことを考えてい

る。多目的ホールは地域の憩いの場でもあり、観光客とつながる場となっているし、キッチンスタジオでは料理体験をしてもらい、地元の食を継続購入してもらえりような仕組みとなっている。加工所では、規格外のものを使って地域商社が 6 次産業化の商品を作成し、付加価値化を進めている。さらに体験型観光は年中何か楽しめるようなプログラムができています。

この町は 5000 人のまちである。海水浴客の減少が問題となっており、人口が減少していることから交流人口を増やすことが課題、さらに現在ある農業を維持するための農業の担い手育成等が必要になっている。このため、商品開発や観光誘客をしている。現在では 80 品目が製品化しており、都内百貨店での贈答品としての展開も進んでいる。

また、道の駅を中心に観光をつなげることが成功につながっている。観光コースのランドオペレーター機能を道の駅に整備している。そのことで今では年間 8200 人が訪れている。

安芸太田でも店舗運営で季節変動があると言っていたが、ここも同じような悩みを抱えていた。しかし、道の駅とみうら枇杷倶楽部ができてからは四季の素材をつなげることによって年中、来訪者が集まり、地域の周遊が増える状況になった。

もう一つの事例は、道の駅もてぎである。ここはレース場があるだけであったが、新しい若者が楽しめる場をつくるということで成功した事例である。

町民、お年寄りに山の落ち葉を拾ってもらい、道の駅に持ってきてもらおうと 500 円で買い取るということをしている。その落ち葉をたい肥として販売するという仕組みをつくった。「観光やな」も風物詩として取り入れている。

ここでは、雇用と定住というキーワードでまちづくりを進めており、産業誘致として養鶏所を誘致した。この養鶏所から卵を買い取り、バームクーヘンを製品化し、それが好評で道の駅だけでは製品化が間に合わず新しく加工場を作った。このように加工をすることでたくさんの雇用を生み出したという事例である。

今回は 2 事例だけ紹介したが、委員のみなさんに全国の成功している道の駅の姿を提供して一緒に新しい道の駅を考えていきたい。

<質疑・応答>

なし

(5) その他

なし

3. 閉会

町長

第 1 回目の委員会は顔合わせ、委員会の趣旨を紹介させていただいた。これからの道の駅はハードではなく、ソフトが重要という意見をいただいた。この委員会で中身をしっかり議論させてもらいながら、さらに全国の状況も踏まえながら検討を進めていきたい。道の駅を利用するのは地域住民であり、いかに使いやすい道の駅を作ることが重要ということがわかった。地域住民に誇りに思ってもらえるような道の駅として整備していきたい。

以上